

パウロは、7つの手紙の中で「倣う者」あるいは「倣って」という言葉を8回用いています。パウロの手紙には、「主に、イエス・キリストに、倣う者」、「わたし(パウロ)に倣う者」、そして「神の諸教会に倣う者」と、三通りの「倣う者」が記されています。パウロは、わたしに倣う者となってほしいと願います。それは「あなたがたも私に倣って、キリストに倣う者となりなさい」という意味です。しかし、この手紙の著者は「神に倣う者となりなさい」と記します。「神に倣う者となりなさい」とは文字通りに、神に倣う、神さまのようになる、ということの意味しているのではないと思います。1節には神さまに倣う根拠として、神に愛されている子供であることがあげられています。子どもが親に愛されている時に親に従うように、神さまに愛されている私たちは、神の子として、神さまの救いに与っている者として、その恵みに応えるふさわしい歩みをしなさいということなのです。ルカ 6:36の「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」と言ったイエスの言葉を思い起こさせます。2節では「キリストは御自身を神に献げた」と記されています。この「献げた」の語は「引き渡した」の意味です。この語は元々法廷用語で「罪人として引き渡される、自分自身を逮捕、処刑されるために引き渡す」という意味の語ですが、この語は共観福音書の伝承では、「イスカリオテのユダの裏切り」に用いられています。最近では「引き渡した」と訳するのが一般的で、元の語に「裏切る」という意味はないのです。また、パウロはキリストが自身を死に「引き渡した」と用いています。キリストの死を祭儀的な「供え物、生け贄」とする思想はヘブライ人への手紙によく出てきます(ヘブ 5:1, 3など)。しかし、ここでの重点はキリストの十字架の死が、私たちに対するキリストの愛の表現であることにあります。

パウロは、「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」(ロマ 5:8)と記しています。ヨハ 15:9に記されているように、イエスの愛を知ることによって、「愛によって歩むという行動が生まれてくるのです。著者は、パウロが語る十字架の愛を原型として、キリスト者たちはこのような質の愛に歩むことが「神に倣う」ことだと言っているのです。

私たちは神さまに愛されている子どもですから、私たちは愛を知らずに育ったのではなく、憎しみの中に育ったのでもありません。だから、私たちは感謝をもって、神さまの救いに与っている者として、その恵みに応える歩みを神さまと共に歩んで行きたいと心から願うのです。